

今回この事業に参加したのは、日本と海外の違いを知りたかったからだ。現地の人々の普段の生活に興味があり、特に、同年代の人と友達として、毎日の生活を共にし、考えていること、興味のあることを理解したかったのだ。そして中国洛陽にホームステイできることになった。

しかし、いきなり出発前に不安を感じるがあった。ホストフレンドにメールを送ったが返信がなかったのだ。後から分かったことだが、中国では、グーグルメールが通じなかった。グーグルのサービス、地図、翻訳アプリ等も利用できず少し不便だった。当地で日本の文化を紹介しようとホストファミリーにユーチューブを見せようとしたら、なぜかこれも閲覧できなかった。情報統制を厳しくしていることが、実感できた。

上海の空港到着後、早速失敗しそうになった。税関で審査を終えた後、ほっとしてリュックを床に置きそうになり先生に注意された。スリや泥棒にあいやすくなるからだ。さらに、上海の商店街で一人はぐれてしまい、先生達に絶対一人で行動してはだめと言われ、岡山よりは、注意深く生活しないといけないと自覚した。上海の風景は、新しい物と懐かしい物が混在して写真撮影に夢中になってしまっていた。

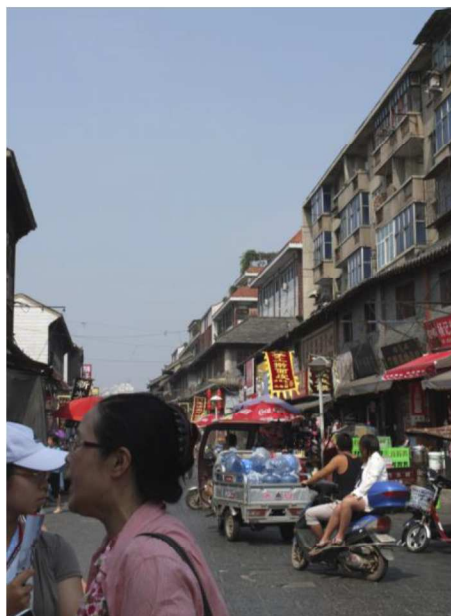
カルチャーショックを受けながらも洛陽に到着。洛陽は青空のない薄い膜に包まれた町だった。歓迎パーティーは、市長さんまで出席した盛大なもので、岡山市の代表として参加したという自覚を持つことができた。ホストファミリーに会い、楽しそうなお父さんを見た時、どきどきした緊張した気持ちがほぐれほっとした。

ホストフレンドの猛さんは、洛陽外国語学校の日本語学科の16歳で日本語が上手だった。中学1年生から日本語を勉強してここまで上手になってすごいと思った。この学校には他にもポルトガル語、朝鮮語、ウイグル語、チベット語、英語などが学べる学校で、入学試験も難しいらしかった。中国が多民族国家だと実感した。

猛さんは、毎日他のホストフレンドと一緒にカラオケやショッピングモール、テーブルゲーム店に連れて行ってくれた。ホストフレンドは、みんな洛陽外国語学校の中高生で日本語が上手だ。一緒に楽しく遊び、日本の若者とあまり変わらない生活だと思った。ただし勉強は、かなり厳しそうだった。難しい宿題の山に驚き、強くないと生きにくい競争社会なんだと感じた。

ホストファミリーのお母さんは、仕事で忙しく朝早く会社に行って夜しか会えなかった。でも、食事は、辛いのが苦手なぼくにあわせて作ってくれた。僕の日本語のあいさつにも、にっこり笑ってくれて嬉しかった。中国では共働きが多いため、安く外食が出来る。僕も猛さんによく連れ出してもらった。量はかなり多く、味付けも辛め、お腹の調子を崩したが、日本から持参した薬でなんとかしのぐことができた。

洛陽は古都であり、古街と呼ばれる旧市街は、煉瓦と石の町並みが美しかったが、狭い通りを電気自転車がびゅんびゅん通り、活気のある町だった。龍門石窟にも行き、山に直接彫ったおよそ千年前の仏像をみた。遠い昔に人力で彫った素晴らしいものだった。それだけ、歴史のある町なのだ。



帰国がとてもさびしく、もっと洛陽にいたいと思った。親切なホストファミリーや、面倒見の良い兄のような猛さん、日本語学科のみなさん、日本から一緒に参加した仲間とも仲良くなり、とても充実した日々だった。

猛さんとは今でもqqと言う中国のソーシャルネットワークで連絡をとりあっている。日本語で。

